様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１０１５

研究課題名（和文）反乱と越境：ロシアにおける1916年反乱の中国新疆への影響

研究課題名（英文）Revolts and crossing border: Influence of the 1916 revolt in Russia on Xinjiang, northwest of China

研究代表者
野田　仁（Noda, Jin）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：００５４９４２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ロシア領中央アジアにおける「1916年反乱」の過程で発生した、隣接する中国新疆への逃亡者について、露・中の資料のみならず、新疆に勢力を展開しようとしていた英国の視線も加えつつ広域的に分析し、以下の点を明らかにした。第一次大戦下のドイツやトルコは中央アジアに関心を寄せ、新疆へ人員を派遣した。外部からの来訪者について、英露の駐カシュガル領事館が新疆当局に伝達していた。独・トルコのファクターや中国の秘密結社の反乱への影響は、ロシア当局の責任転嫁や過大評価により、誇大に喧伝されていた。その結果、実質を伴わないムスリム・ネットワークの虚像が、英露および中国の前に見えていたことになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国外での研究集会において報告を行うことで、海外研究者からのコメントを取り入れたうえで、成果をまとめることができた。本研究が取る、中国側からの視線を交えて1916年反乱を研究することはこれまでの研究にはほとんど見られなかった手法であり、今後の研究状況に与える影響は少なくないと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the Sino-Russian border in Xinjiang around 1916 when large-scale human migration was observed. The purpose of this study is to identify the intersection of local networks and global international relations. For this, I investigated compiled collections of Russian imperial documents, British documents, and Chinese official documents so that I could analyze multi lateral materials. Detailed examination of information from Russian consulates in Xinjiang reveals that the uprising was not caused by the Gelaohui and German-Turkish incitement. Although a few infiltrators had entered Xinjiang, this information was exaggerated by the Russian authorities, who shifted responsibility and overestimated the situation. These exaggerated threats, which could include Britain's wariness of Germany, were communicated to Xinjiang government officials, which lead to warnings of foreign incitement. Speculations about these external factors show a phantom of the Muslim networks.

研究分野：中央アジア史

キーワード：革命　中央アジア　移民　カザフ　新疆

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、1916 年にロシア帝国支配下の中央アジアで起こった現地住民の蜂起・反乱に注目し、その過程で東に隣接する中国西北・新疆への逃亡者について検討するものである。その背景にあったのは、推計 30 万にのぼる逃亡者が、ロシア領を離れ中国領内に移動することを余儀なくされた理由や結末について、議論の余地が残されていると考えられたことである。とりわけ、反乱をロシア国内の文脈から検討した研究はありながら、中華民国ないし新疆省政府の視点から見た研究は乏しく、反乱・移動の影響についての評価がバランスを欠いていた点は、あらためて検討すべきことと考えられたのである。

２．研究の目的

上記の背景を受けて、本研究の目的として、「1916 年反乱」を国際関係の視点から再考察することと設定し、ロシア帝国の枠組みのみならず中国にまで広げて当該反乱を考察し、とりわけ中国（新疆省）に対する影響に焦点を当てて検討することを当初の目的としていた。それにより、①新疆・東トルキスタンの 1910 年代の政治構造②反乱の近代新疆史の外的要因としての位置づけ③1916 年反乱の際の新疆現地のムスリムの動向の 3 点を明らかにする見通しを持っていた。

３．研究の方法

本研究の遂行には、東西資料、すなわちロシア側資料と中国側資料の対照が不可欠である。刊行されている資料を収集するほか、文書館資料の調査（台湾、ロシア、カザフスタン）も行い、総合的に資料を集めたうえで、それらを突き合わせて、ロシア・中国間の外交交渉に見える双方の認識と、さらにそれらが対立するところに中国内の残留する難民が生まれる過程、あわせて中国領内、とりわけ新疆社会に対してロシア側からの流入者・残留者たちが与えた影響を見ることができると考えられる。さらに、それらの情報から、その後続く新疆の政治的混乱の要因・構造を把握することができるのではないかと考えていた。

ただし、当初予定していたロシア側資料の調査は十分に行うことができず、代わりに期間を延長して、イギリスのインド関連文書群を新たに加え、イギリスのロシアとの協力関係構築のプロセスや、イギリスがもたらした情報に基づく新疆政府の対応を考察することにし、成果をまとめた。

４．研究成果

年度ごとの成果として、2019 年度は、1916 年反乱およびその後の移動について、中露双方の観点からの分析が必要であることが再認識できたことがある。また新疆史の側から見たとき、1916 年反乱の影響は十分に検討されておらず、ロシア（ソ連）側の研究史との接続が必要であることも判明した。2020 年度は、1916 年反乱を契機とする中国側への移動について、とくにドゥンガン（回民・回族）のケースに焦点を当てた。そこから見えてきたのは、露清国境の開放性と、難民の移動に対する各方面の対応の違いであった。2021 年度は、上述のように、イギリスの新疆に対するアプローチを明らかにした。

2022 年度にかけて最終的に整理しえた内容は、下記のとおりである。

第一次大戦下において、中央アジアのムスリムの存在は、ドイツやトルコの関心を呼び、新疆への使節・調査隊の派遣につながった。それら外部からの来訪者については、英露の駐カシュガル領事館が新疆当局に通報・提議をする役割を果たしていた。このとき、アクサカルらの商業ネットワークが情報源になっていたことも重要である。ロシア領セミレチエを中心として 1916 年反乱が起こると、ロシア領内に滞在する中国籍保持者が被害を受けたり、多数の難民が新疆に逃亡したりし、大きな混乱が発生した。

先行研究が指摘していた東西をつなぐ回民のネットワーク、さらに哥老会と呼ばれる秘密結社などロシア国外からの扇動も、たしかに 1916 年反乱の要因であったと考えられるが、本研究が詳細に分析した新疆各地のロシア領事館からの情報によると、哥老会やドイツ・トルコの 1916 年反乱への影響は、ロシア当局の責任転嫁や過大評価により、誇大に喧伝されていたことが明らかになった。ここに、英国のドイツに対する警戒心も加わり、それらが楊増新をはじめとする新疆政府の各地担当官に伝えられたとき、中国側の、外国による扇動への警戒につながったのである。

哥老会のファクターが新疆省政府の対策の中で語られることはほとんどなく、新疆側が実際に重点的に対応していたのは、英国領事館が強く警戒するドイツ・トルコからの支援であった。これら外部からの要因について、憶測が絡み合い、実質を伴わないムスリム・ネットワークが、英露さらには中国（新疆省政府）の前に現出したことにむしろ注目すべきであることが明らかに

なった。

成果の位置づけやインパクトについては、2020 年開催の International Workshop “The revolt of 1916 in Central Asia and refugees into Xinjiang: Reconsideration from the crossborder perspective”や、オーストリア科学アカデミーにおける共同研究プロジェクトの研究集会（2022 年 9 月）で報告をし、海外研究者との意見交換のうえで成果をまとめることができたほか、国内学術誌に投稿した論文が、2023 年度中に掲載の予定である。

今後の展望としては以下の点がある。1916 年反乱の後、第一次大戦の展開とロシア革命の勃発により、英国およびロシア旧体制派の関心がロシア領内のムスリムが新疆に与える影響に移ると、それに対応する新疆省側でも、東西のムスリム・ネットワークは是認しながら、むしろその関係を断ち切り、新疆内のムスリムを独立して扱うようになる。それ以降の言わば分断的状況を検討することは次に検討すべき課題と考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Noda Jin	４．巻 none
２．論文標題 The Kazakhs, 16th-19th Centuries	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Oxford Research Encyclopedia of Asian History	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/acrefore/9780190277727.013.317	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野田仁	４．巻 90
２．論文標題 新疆における露清間の国際集会裁判の運用―帝国と民族の境界をこえて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西南アジア研究	６．最初と最後の頁 53, 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/seinan-asia-kenkyu_90_53	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Noda Jin	４．巻 14
２．論文標題 Development of Central Eurasian Studies in Japan during 2000-2015	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Asian Research Trends New Series	６．最初と最後の頁 31, 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Jin Noda
２．発表標題 Mobility and Muslim networks in the Xinjiang border area around the 1916 revolt in Russian Central Asia
３．学会等名 Commission for the Study of Islam in Central Eurasia Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Jin NODA
２．発表標題 О возможности изучения истории казахов из точки зрения китайских и японских архивных документов
３．学会等名 История казахской государственности в артефактах и архивных документах（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Noda Jin
２．発表標題 How did the foreign affairs affect the migrations into Xinjiang? Focusing on the Dungan and Kazakh cases
３．学会等名 International Workshop “The revolt of 1916 in Central Asia and refugees into Xinjiang: Reconsideration from the cross border perspective”（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 野田仁
２．発表標題 中央アジアにおける慣習法の歴史と現在―現代クルグズにかんする２つの研究の紹介を中心に
３．学会等名 イスラーム信頼学ワークショップ「東南アジアと中央アジアの法の多元性比較」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Noda Jin
２．発表標題 Various “khans” in an Empire: Difference in the attitudes of the Qing Empire to Torghuts and Kazakhs in the 2nd half of 18C
３．学会等名 European Society for Central Asian Studies, The sixteenth conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noda Jin
２．発表標題 Legal Pluralism for Kazakh Nomads beyond the Russo-Qing Imperial Border found in the International Assembly
３．学会等名 International Workshop "Contested Legal Practices in the Nineteenth Century: The Volga-Ural Region, Kazakh Steppe, and Eastern Anatolia"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noda Jin
２．発表標題 The “Mixed” Assembly Court and Mixed Jurisprudence in Xinjiang: For the Conflict Resolutions between the Russian and Qing Empires
３．学会等名 "International Workshop “Between the Imperial Laws and Islamic Law: Cases in Central Eurasia”"（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 野田仁，長峰博之，David Brophy，小沼孝博，塩谷哲史，近藤信彰，木村暁，秋山徹，小野亮介，磯貝真澄	４．発行年 2023年
２．出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	５．総ページ数 244
３．書名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照	

１．著者名 野田仁・小松久男	４．発行年 2019年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 315
３．書名 近代中央ユーラシアの眺望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Commission for the Study of Islam in Central Eurasia, Annual Meeting	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関